2013.11.2

秋の似合う作曲家ブラームスと秋の音楽 その3

プログラム

毎年この時期になると聴きたくなる作曲家がブラームスです。今回は2007年と2008年の10月に特集しました“秋の似合う作曲家ブラームス”を三たびお送りします。

クラリネット五重奏曲はリヒャルト・ミュールフェルトという名クラリネット奏者との出会いから生まれ、クラリネットの美しい音色と技巧を生かした最晩年の傑作。3つの間奏曲も最晩年のピアノ作品の一つで、第2番は即興曲風の佳曲。二重協奏曲は晩年最後の協奏曲作品で、ヴァイオリンとチェロを融合させた優れた技法とブラームスらしい重厚な響きを持った名曲です。弦楽六重奏曲第1番だけが今回の特集の唯一若い頃の作品ですが、美しい旋律がのびのびと歌われ、若きブラームスの瑞々しい情感が溢れ出た名作です。交響曲第4番はブラームス最後の交響曲にして最高傑作と呼ぶに相応しい作品で、第2楽章に宗教音楽の旋法のひとつフリギア旋法を、第4楽章にはバロック時代の形式であるパッサカリア（シャコンヌ）を用いるなど、より古典的な趣きを持ち、美しさと情熱に溢れた響きは円熟の極みと言っても良いでしょう。今日はこの作品の素晴らしさを見事に伝えるバーンスタインの名演でお聴きください。

今日はブラームスの他、秋をテーマにした作品を合わせてお聴きいただきます。チャイコフスキーの秋の歌は原曲は有名なピアノ曲集の1曲ですが、今回はチェロ編曲版です。フランスの女流作曲家シャミナードは、200曲に及ぶピアノ曲を書いていますが、この“秋”も魅力的な小品です。

＊＊＊＊＊＊＊

ヨハネス・ブラームス（1833～1897）：
クラリネット五重奏曲ロ短調op.115～第1楽章、第2楽章から、第4楽章から
ザビーネ・マイヤー（クラリネット）／東京クァルテット
（2002.3.14　東京オペラシティ・コンサートホールでのLive）

3つの間奏曲op.117～第2曲変ロ短調
ヴァレリー・アファナシエフ（ピアノ）
（1992.3.9　オランダ　DENON盤）

ヴァイオリンとチェロの為の二重協奏曲イ短調op.102～抜粋
アンネ・ゾフィー・ムター（ヴァイオリン）／アントニオ・メネセス（チェロ）
ヘルベルト・フォン・カラヤン指揮ベルリン・フィルハーモニー管弦楽団
（1983.2.19　ベルリン、フィルハーモニーホールでのLive）

＊＊＊ 休 憩 ＊＊＊

セシル・シャミナード（1857～1944）：
“秋”op.35-2
モーラ・リンパニー（ピアノ）
（1990.5録音　ＥＭＩ盤）

ピョートル・チャイコフスキー（1840～1891）：
四季～第10曲“秋の歌”
オーフラ・ハーノイ（チェロ）/マイケル・デュセク（ピアノ）
（1991.12.17　カザルスホールでのLive）

ヨハネス・ブラームス（1833～1897）：
弦楽六重奏曲第1番変ロ長調op.18～第2楽章
アイザック・スターン（ヴァイオリン）/ジェイミー・ラレード（ヴィオラ）/ヨーヨー・マ（チェロ）
チョーリヤン・リン（ヴァイオリン）/マーク・ペスカノフ（ヴィオラ）/堤　剛（チェロ）
（1986.11.23　サントリーホールでのLive）

交響曲第4番ホ短調op.98～第1楽章、第2楽章から、第4楽章
レナード・バーンスタイン指揮ウィーン・フィルハーモニー管弦楽団
（1988.9.8　ルツェルン、クンストハウスでのLive）